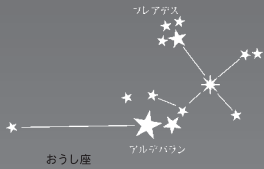


ポラリスを仰ぐ北の大地から



北の無人駅から

千歳医師会 会長 佐藤 貢

筋ジストロフィーの障がい者とボランティアの喜怒哀楽を描いたドキュメンタリーでベストセラーになった『こんな夜更けにバナナかよ』の著者渡辺一史さん（札幌在住）が久しぶりに出版した書名である。

北海道が今抱えている農業、漁業、自然保護、過疎等の社会問題を地方の無人駅を起点に8年あまり取材した力作である。

農業問題は新十津川駅（札沼線）、漁業は増毛駅（留萌本線）、野生動物と自然保護は茅沼駅（釧網本線）など6つの駅がクローズアップされている。この本は、道外でも高い評価を受け、サントリー学芸賞、早稲田ジャーナリズム大賞、地方出版文化功労賞等を受賞している。

私のような中高年層にとって、国鉄（現JR）の駅には思い出深いものがある。広大な北海道では車社会が未発達の時代には国鉄は重要な移動手段であった。そして利用した駅やその周辺の風景は郷愁のヒトコマとなって思い出す。とりわけ、私にとって思い出深いのは、日高本線の厚賀駅（ひだか町）である。

日高本線は、苫小牧から類似に至る約150kmの路線で、厚賀駅はそのほぼ中央に位置する。

高校、大学時代は年に数度帰省する時、必ず利用していた。駅舎を出ると右手に農協支所、左手にはハイヤー会社、T字路を右にすすむと木工場や漁港に至り、左にすすむと映画館や街の中心部に続いていた。お盆、正月、お祭り列車も駅舎も中心街も人々で活気に満ちていたあの頃…。

しかし現在では、道内の465の駅のうち8割は無人駅と変貌した状況は、地方の過疎化の象徴のように思われ本当に残念である。

数十年振りに訪れた厚賀駅はやはり無人駅であったが、春光に輝く太平洋を静かに俯瞰していた。



そらぶちキッズキャンプ

滝川市医師会 会長 篠島 弘

1988年、俳優、故ポール・ニューマン氏は、難病の子どもたちやその家族の生活の豊かさの向上という希望を抱いて、世界最初の小児がん等の難病と闘う子どもたちとその家族のための医療施設を整えたキャンプ場を、米国コネチカット州に設立し、The Hole in the Wall Gang Camp と名付けました。この運動は米国のみならず、海外にも広がり、アイルランド、フランス、英国、イタリア、ハンガリー、イスラエルと、世界中にキャンプ場が拡大しました。これらの公認キャンプ場を結びつけるネットワークとして、ホール・イン・ザ・ウォール協会が非営利公益法人として2001年に設立され、2012年に名称をSeriousFun Children's Network と改称しています。

日本においてもこのキャンプ場をモデルにしたキャンプ場の実現に向けて、2004年に「そらぶちキッズキャンプを創る会」が発足し、北海道連絡所を滝川市医師会館に開設しました。2008年12月25日に「一般財団法人そらぶちキッズキャンプ」として登記を完了し、2010年2月1日、北海道知事から「公益財団法人そらぶちキッズキャンプ」として認定されました。2012年には、滝川市江部乙町丸加高原に事務棟や医療棟、宿泊棟、食堂、ゲストハウス、ツリーハウスなどの専用施設群が完成し、全国から難病と闘う子どもらを招待してキャンプを実施しています。

昨年2013年10月には国際的キャンプ団体シリアスファン・チルドレンズネットワークの準会員に認定されました。そらぶちキッズキャンプは、世界16番目の公認キャンプ場で、中東を除くアジアでは初の公認キャンプ場となりました。医師、看護師による医療的バックアップのもと、難病と闘う子どもたちが、自然の中で、安心して、安全に楽しく過ごせる質の高いキャンプを提供しています。詳しくは下記のウェブサイトをご覧ください。

<http://www.solaputi.jp/>

<https://www.seriousfunnetwork.org/>